



カトリック新潟教区
編集発行人 教区報編集部
〒951-8106
新潟市東大畑通1-656
TEL. 025-222-7457
FAX. 025-222-7467

取り組み始まる 青少年・滞日外国人司牧

教区司祭の集い

六月五日午後から七日昼まで、秋田県由利本荘市鳥海町のフォレスト鳥海で新潟教区司祭をはじめ秋田・山形・新潟県で働いている二十七人の司祭が集まって、年に一度の司祭の集いが開かれた。



活発に意見が交わされた教区の大きな課題

SADE in 妙高

8月8日から10日までの3日間、妙高教会と妙高赤倉山荘を会場に、「SADE in 妙高」が開催された。呼びかけは土崎教会。

この2泊3日の間は天候にも恵まれ、爽やかな高原の大自然の中で、食事も外のテラスで取り、自然に包まれるように時間が流れて行った。

秋田、土崎、寺尾、長岡表町、柏崎、高田、糸魚川、東京板橋から集まった参加者18人は、マリオ神父様と、佐藤和弘氏（高田教会）の指導のもとで心を開き、講話を聴いたり、テーマに沿ってグループミーティングを行い、自己と向き合いながら時間を忘れて本音で分かち合った。

最後の感謝ミサでは喜びも絶頂となり、「シャローム！」と叫びあい、抱き合いながら平和の挨拶を交わし、「Walk in the light」の大合唱で閉祭となった。

今回のSADEでは、秋田からの参加者のために車を運転してくれた人や、乳飲み子を抱えながらも食事作りや掃除の奉仕をしてくれたSADEのOBの方々など、たくさんの奉仕者の存在も光っていた。



参加者が次の世代を導き支えていく、この素晴らしいつながりには、神さまの息吹きが実感されていた。（土崎教会 石崎利巳）

山形 聖体奉仕者の研修会

六月二十四日（土）、山形教会で山形教会主任ピアス・ムレン神父、助任のスリ・ワルヨ神父が大瀧浩一神父（新潟教会）を講師に迎えて聖体奉仕者の更新者を対象に山形地区聖体奉仕者研修会が開かれた。

研修会には山形教会十三人、鶴岡教会七人、酒田教会一人、米沢教会二人、長井教会一人の二十四人が参加した。

「聖体に込められた神の思い—聖体という生き方」をテーマ

に行われた研修会は、ヨハネ・パウロ2世が聖体の年の開幕にあたって発布された使徒的書簡『主よ、一緒にお泊りください』に記されている聖体に秘められた神の三つのプロジェクト

サマースクール

八月一日（火）から三日（木）まで、カトリック妙高教会と赤倉山荘を会場として、鳥屋野・花園・新潟教会の教会学校合同サマースクールを開催した。今回は、人数の都合から中学生も合流し、児童・生徒合計二十八人の参加であった。

八月一日は、いもり池の散策、二日は黒姫高原訪問、黒姫童話館の見学、三日はミサを行った。一日に妙高教会に向かう途中の天候は雨天であったが、妙高教会に到着する頃から天候が回復し、三日まで好天に恵まれた。神様がお造りになった自然の恵みを学び、感謝と祈りの態度



妙高教会の前で

「感謝」「連帯」「奉仕」について、どのように理解し共同体の中で表現（行動）すべきかを、ユーモアを交えた普段私たちが使っている言葉で説明があり、良く理解ができた。

午前と午後の講話の間の休憩時間が比較的長かったこともあり、同じ地区でもなかなか会う機会が少ない山形県内の各教会での話題を話し合うことも出来、お互いの交わりを深める良い機会であった。

（山形教会 沼沢敬志）

を養い、集団生活を通して、協調性を養うという開催目的に参加者一人ひとりが近づけたなら、意味があったと思う。

（高橋学神父）

共同体作り

み言葉と聖体に生かされて

新発田地区大会

六月十八日、キリストの聖体の主日に新発田教会と新発田聖母幼稚園を会場に、第21回新発田地区信徒大会が開催され、一〇〇人近い参加者で熱気にあふれた。

十時から始まった菊地司教司式のミサでは合同堅信式も行われ、みんなに見守られて九人の信徒(栃尾教会一人、三条教会五人、新発田教会三人)に堅信の秘跡が授けられた。

大会は菊地司教の年頭司牧書簡「喜びの福音に生かされて」に基づいて午前の部は各教会がこの半年共同体作りをどのように進めて来たかを振り返り、午後の部はともに聖体の前で祈り、また他教会の信徒と語り合うことからこれらの

弁に発表され、みんな真剣に聞き入っていた。
午後の部ではまず、聖堂で聖体を顕示してしばし静かに黙想の時間を持ち、その後全員で口ザリオの祈りを唱えながら聖体行列をして聖堂の周囲を一周した。

続いて聖堂、司祭館、信徒会館、幼稚園保育室へと七グループに分かれて親しく語り合う分科会の時間を

た。
盛りだくさんの企画となったが、新発田に巡礼に来てもらったような地区大会となったように思われる。

また十年ぶりに当番教会となった新発田教会信徒たちも、不慣れと言いつつも、力を合わせ心を合わせて一人ひとりができる働きをささげながら、他教会の大勢の人々をお迎えしたことは大いに学ぶ機会となった。

新発田地区のどの教会も共同体作りは決して完璧なものではなかった。この大会でいただいた恵みが今後後半、またそれぞれの教会での共同体作りに生かされますように。

(新発田教会 石黒晃泰神父)

各地で信徒大会

「喜ぶの福音に生かされて」をテーマに「共同体作り―み言葉と聖体に生かされて―」とした。

ミサに続いて、午前の部では各教会代表者からこの半年の共同体作りに取り組んできた中間報告があり、それぞれの教会の置かれた状況での信徒たちの工夫や率直な意見が予定時間を大幅に過ぎて雄

持ち、「楽しかった」、「いろいろな教会の方の話を聞けて良かった」、「あつという間で時間が足りなかった」といった声が続けられた。

ミサの始まる頃は小雨もぱらついていていたが、午後には汗ばむほどの晴天となり、みんな喜びのうちに閉会となっ



杉丸太組の聖堂で信徒大会

共に歩む

教区保育者研修会を開く



小グループによる話し合い保育者研修会

八月十七日と十八日の二日間、新潟市のホテルを会場に教区全体の幼稚園や保育園などで幼児教育や福祉に関わる一二〇人のカトリック保育者が集まって「共に歩む―カトリック施設で働く意味」をテーマに研修会が開かれた。

共に歩む―カトリック施設で働く意味―

秋田・山形・新潟三県のカトリック幼稚園・保育園・福祉施設で働く保育者研修会が、今年も八月十七日・十八日に新潟市のスターホテルで開かれた。

昨年までは専門家や、有名な教育者を招き、講演を通して学ぶ形式で研修会が進められて来たが、日々激変する現代社会の流れの中で、幼児と共に生きる個々の保育者が抱えている問題や悩みを共有し、連携していくことを「ねらい」とした、ボトムアップ型(現場の声を吸い上げる形の)研修会の開催を試みた。

現場からの問題提起(亀田平和の園園長 坂東光子氏)、五十年前と比べて、司祭・修道者園長の大幅な減少に伴い薄れていく建学の精神の、保育への反映の難しさ(新津カトリック幼稚園主任 栗原奈津子氏)、家庭・地域社会の変異と多様な価値観、社会のニーズへの応答(上越カトリック天使幼稚園園長 マリオ・カンドウチ師)など現場に携わる方々からの問題提起を引き金に、人格形成の最も大切な幼児期に現代の子どもが受ける社会的なひずみを考え、悩み・経験を分かち合った。

から広げ得たようである。
一日目の最後は、山田すみ江氏からの現場で実践できる「うた遊び・手遊び」を指導して頂き、緊張をほぐして終了した。
二日目のグループ討議の発表から伝わる参加者一人一人の保育に対する熱意を受けて、菊地功司教様は講話で、カトリック保育者としての子どもへの視点と心を、聖書を引用して説明され、高価な香油でキリストの足を拭いたマグダラのマリアへのキリストの姿から、保育者の子どもに対する日々の関わり方に大きなヒントを頂いた。
参加者の殆どは、キリスト者ではない保育者であるが、その約半数ほどがアンケートに、カトリック施設で働く保育者として「キリストを知りたい」と記していた。
子どもが未来に平和を築ける人になるために、いまキリストの心が幼児教育に携わる保育者に求められているのを、今回の研修会は知らせてくれたように思う。
保育現場に戻り、カトリック保育者としての意味を更に模索しながら、時代の要求に対処する日々が続くが、研修で体験した保育者間の絆を大切に、「ともに歩んでいける」思いが、今回の実りとなることを願っている。
(第三十六回新潟教区カトリック保育者研修会運営委員会委員 ノートルダム幼稚園々長 シスター 金光明美)

後藤文雄師を講師に

秋田地区信徒の集い(信徒大会)

六月十一日(三位一体の主日) 大館教会を会場にして第21回秋田地区信徒の集い(信徒大会)を開催し、各教会から百十数人が参加した。



カンボジア難民との体験も語る後藤神父

開会に先立ち、菊地司教様は挨拶に新潟教区に宣教司牧評議会の動きがあることを話され、司祭、修道者、信徒が一緒になって宣教司牧を心がけることを呼びかけられた。

メインは後藤文雄神父様(吉祥寺教会)の「福音宣教から見た平和」と題する講演であった。

講演の中で後藤神父様は「私たちに三位一体の神から湧き出るものを責任として受けとめ

『今、自分はここにある』という喜びを神秘として伝えることが大切である。福音宣教とは、神から包まれた私たちが和解し、許し合うこと。これによって平和を築きあげていきましよう」と強調された。

続いて親睦の昼食会があり、午後一時から感謝のミサが捧げられた。菊地司教様司式のミサは秋田地区の司祭八人が共祭する荘厳なものであった。集まった信徒はそれぞれ宣教

司牧、福音宣教と平和の輪を広げていくことを心に誓い、来年の集いでの再会を約束しあっていた。

(土崎教会 石崎利巳)

命 召

始めにあったこと

大瀧 浩一 神父

(新潟教会)



三十二歳になったとき、「これで自分の半分はクリスチャンになった」と冗談で友人に話したのを覚えています。洗礼を受けたのは、十六歳でした。キリスト教への知的な好奇心もあって、高校に進学して間もなく、学校の近くにあった教会を訪ねました。カトリックの教会であ

る必要はなかったのです。むしろそれまで見聞きした知識では、カトリックに良い印象は持っていませんでした。ところが初めて訪ねた教会がカトリックだった。好くない印象の真偽を確かめてやろうという、もう一つの好奇心が加わるようになりました。それから入門講座を始めることになったのですが、なんと一年足らずで受洗となりました。

かどうか心配していたそうです(今まで続いているところをみると、必ずしも失敗ではなかったのでしょうか)。準備期間の不足は、神学校の六年間で補ったということでしょうか)。私が受洗し司祭の道を選んだきっかけを思い起こすとき、そこに一人のイタリア人宣教師の存在があります。彼は最初中国宣教に派遣されたのですが、途中で中国を追われ日本で働くことになりました。今ならまず日本語と日本の文化を学び、十分な準備をして小教区に派遣される頃でしょうか、彼が来日した頃の日本には、そのような十分な準備の場はなかったようです。すぐに小教区に派遣され、日本語の習得も小教区の仕事も何もかも同時進行だったと聞きました。そのせいもあるのでしょうか。日本語はお世辞にも上手とは言えません。この彼が私の入門講座を担当してくれま

した。最初は、一つ一つの言葉を聞き取るのに苦労しました。間違えて理解したこともあるかもしれません。しかし、信じる教えのために祖国を離れ、日本のために働く一人の宣教師の姿の中に、大切なことはしっかりと伝わってきました。

司祭に叙階されて二年後、恩師の祖国で二年間の研修の機会を与えられました。彼の苦勞に較べたらその足元にも及びませんが、彼が日本で出会ったであろう困難のほんの少しだけでも分からせてもらったように思います。たどたどしい日本語で熱心に教えてくれた彼の姿を何度となく思い起こしました。

昨年の十二月、恩師は祖国イタリアで天に召されました。キリスト者として司祭として歩む私にとって、キリストの教えを伝えてくれたこの宣教師との出会いは、その歩みの出発点であると同時に今もその支えです。

喜びの福音に生かされて

長岡地区大会

五月二十八日、第30回長岡地区信徒大会が盛大に開催された。

これに合わせて地区内の中高校生は前日から長岡表町教会に集まり、祈りや分かち合いの楽しい一晚を過ごし当日合流した。

大会当日は小雨の天候であったが、糸魚川、高田、直江津、妙高、柏崎、長岡表町、長岡福祉と地元十日町教会から一四〇人を超す参加者であった。

「喜びの福音に生かされて」のテーマで一〇グループに分か



女子奉獻生活者の集い

宣教司牧評議会への参与を目指す

八月二十七日(日)、秋田の聖体奉仕会を会場に新潟教区で働く女子修道会、在俗会の九つの会すべてから全会員の半数近く五十数人が集って来年四月に立ち上げられる予定の教区宣教司牧評議会に代表を送り、新潟教区の一一致と交わり、福音宣教に参与しようと話し合った。

参加者から次の感想をうかがった。

新潟教区の皆さんは、私たちの教区にシスターたち(女子修道会・在俗会会員)が何人いるかご存知ですか?なんと百二十人を超えるのです。

八月末、残暑というにはまだまだ日差しの強い一日、秋田の聖体奉仕会に、その半数近くが集まりました。シスターたちも人の子、「日曜日に遠くまで出かけるのはちょっとね。でも司教様のお呼びだから」と、正直なところいやいやながら参加したシスターも多かったのです。でも、一日を終わったあと、「本当に集まってよかった、恵みいっぱい的一天だった」と新しい力と絆をいだいて帰路に着きました。

では、何があったのか、何をしたのかお話ししましょう。まず、司教様から、「日本の教会の基本方針と優先課題」をふまえて、「新潟教区の優先課題と具体的課題と展望」についてお話しを伺いました。



聖体奉仕会本部の和風の聖堂に集う

昨年九月の司牧書簡で示された新潟教区の優先課題は次の二点でした。
一、教会共同体が「一致のため」の場」となり、交わりと一致

よう召された私たちの課題でもあります。

集まってみて改めて気がついたのですが、シスターたちの間でさえ互いがどこにいて、何をしているかよく分かっていないのです。ですから、五十三人という出席者の数に「こんなに多くの仲間が」と驚いたのです。新潟教区にいる同じ奉獻生活者同士でありながら、課題に示されて「教会共同体」の基礎作りさえできていなかったといえるかもしれません。

顔を合わせて「新潟教区の奉獻生活者」であることを意識し、元気づけられた私たちは、今後どのように結集し、協力し合っているのかに課題に示された使命を果して行くことができるのかについて、祈り、分かち合い、話し合いました。

の「しるしであり道具」となる二、教会共同体が、福音に生かされた共同体として成長し、その上で自らが福音宣教者となる
この二つの課題は、当然、新潟教区にあって教区に奉仕する

他の多くの教区には、修道女連盟があり、様々な活動をしています。そんな経験や思い浮かべても、そのまま新潟教区で同じような形態の組織を作り、活動するといわけにはゆきません。地理的に拡散していること、交通の便が悪いこと、各修道院のメンバーが少なくないこと、高齢化、使徒職の多

忙さと責任など困難な点が多々あります。ですから私たちは、緩やかに結集する新潟教区独自のスタイルを工夫することにしました。

祈りあうこと、情報交換をすること、研修等に招きあうこと、地区別の集いを持つこと、

司教の日記(抄)

<http://homepage2.nifty.com/isaoynk/BishopTop.htm>



と部岐のペトロ 187殉教者

年に一度は顔を合わせる集いを持つことなどが提案されました。来年四月に立ち上げられる予定の宣教司牧評議会にも、今回の集いで見え始めたつながりを基盤に私たちの代表を送り、新潟教区の一一致と交わり、福音宣教により強く結ばれ、参与する

ことができそうです。私たちは今回の集いで、希望を抱くと同時に現実の厚い壁も再認識しました。そして、善き神様に力と勇気を願いながら、教会共同体としての成長の旅を、教区の皆様と共に歩み始めました。

新潟教区からもその中では最も多となる五十三人が、山形県の米沢で殉教し

ています。この殉教の現代的意味を解説している中央協議会のホームページには、次のように記されています。

『彼らは英雄や勝者として行動したわけではありません。ただ神との間に、きわめて密接な関係を築くことができた人びとです。だから自分たちの時代背

景の中で、殉教という実を結んだのです。『殉教』に通じる神との密接な関係を深めることは、時代を超えて教会に求められる基本的な生き方でありま

す。『ペトロ岐部と一八七殉教者』は、それぞれ、現代に通じるメッセージをもっています。が、その根底に流れる共通点

は、神と一致した生き方を貫いたこと。言い換えれば、神の価値観を公言し、福音的でない価

値観を、勇気をもって拒否したことではないでしょうか。◇

殉教地へ、列福祈って三〇〇人

二〇〇二年十月十四日、三〇〇人を超える北山原への巡礼団を迎えて米沢教会は、ルイス甘糟右衛門ら五十三人の殉教遺跡を発見したシュヴィエンテク神父(神言会)が一九二七年、この地に教会を創立して以来七十五周年となる記念の感謝ミサを捧げた。

ミサの中でパンとブドウ酒に加えて、この日特別に用意した一枚の額を奉納した。

それは米沢の殉教をローマにレポートしたジョアン・バプチスタ・ポルロ神父の一六二九年の手紙だった。

ミサ後、巡礼団は教会から北山原へ向かう米沢市街約二キロの道をパレード、先頭を行く千原通明神父はその手紙を掲げて歩いた。

(新潟教区北山原巡礼特別号二〇〇二・一〇・二七山形教会発行より)